

書評

明治学院百五十年史編集委員会編

『明治学院百五十年史』

(学校法人明治学院 二〇一三年)

鈴木勇一郎

1、本書の概要

本書は、明治学院の百五十年の歴史をあとづける正史として編纂されたものである。

準備委員会の発足から刊行まで約七年。近年の各学校の年史編纂の状況からすると、非常に短い期間で刊行にこぎつけている。関係者の非常な努力と苦労があったことは想像に難くない。

はじめに全体の構成を概観しておきたい。

序章 文学のなかに登場する明治学院の風景

第一節 居留地に暮した宣教師たち―若き生命の朝ぼらけ

第二節 文学青年のつどう学び舎―白金の丘に根深く

第三節 批判の精神を―新しき時代は待てり

第四節 都市化、社会化のもとで―書あらば書を窮めむ

第五節 響く軍靴と忍び寄る銃口―もろともに遠くのぞみて

第六章 新生と再生と―眼さめよ起てよ畏るるなかれ
第一章 幕末・維新から明治へ

第一節 プロテスタントの東洋伝道と日本

第二節 アメリカ長老教会の日本伝道

第三節 アメリカ・オランダ改革派教会の日本伝道

第四節 築地居留地とミッシェンスクール

第五節 スコットランド一致長老教会の日本伝道

第六節 ミッシェンの合同の日本基督一致教会の成立

第七節 東京一致神学校の創立

第二章 明治学院と白金の丘

第一節 キリスト教教育と明治学院

第二節 文部省訓令一二号と明治学院

第三節 日本基督教会と神学部

第四節 学院と社会の関わり

第五節 明治学院財団法人の認可

第六節 明治の終り

第三章 大正デモクラシー下の明治学院

第一節 大正自由教育と明治学院

第二節 高等学部の合同運動と拡充

第三節 中学部の膨張

第四節 総理の交代

- 第五節 神学部の動向
- 第六節 明治学院教会の設立
- 第七節 関東大震災の明治学院
- 第八節 大正期の宣教師たち
- 第四章 昭和戦前期―苦難の道を歩む
 - 第一節 昭和恐慌と明治学院
 - 第二節 戦時下の明治学院
- 第五章 戦後復興から高度経済成長へ
 - 第一節 焼け跡からの再出発
 - 第二節 再建から変革の時代へ
- 第六章 拡大から充実した教育を目指して
 - 第一節 躍進する明治学院
 - 第二節 揺れる大学―大衆社会化と大学の動揺
- 第七章 新たに世紀を拓く
 - 第一節 マス・プロ化する大学キャンパス
 - 第二節 創立一〇〇周年記念式典と記念事業
 - 第三節 新たなキャンパスを求めて
 - 第四節 白金キャンパスの再開発
 - 第五節 平和を掲げて学院の理念を検証
 - 第六節 学生生活の変化とキャンパスライフ
- 第八章 明治学院高等学校の歩み
 - 第一節 戦後教育のはじまり―希望と混沌の中で
 - 第二節 明治学院が発展するなかで
- 第三節 激動の一九七〇年代
- 第四節 急激に進む少子化に向けた模索
- 第五節 二一世紀の明治学院高等学校
- 第六節 二一世紀の可能性
- 第九章 明治学院中学校・明治学院東村山高等学校の歩み
 - 第一節 東村山高等学校の開設
 - 第二節 充実した教育内容の確保
 - 第三節 相次ぐ危機を乗り越えて
 - 第四節 学校改革への道程
 - 第五節 男女共学路線の発展とその後
 - 第六節 教育内容の更なる充実を目指して
- 第一〇章 テネシー明治学院高等部の歩み
 - 第一節 テネシー明治学院の開校
 - 第二節 教育の内容とその特徴
 - 第三節 日々の授業と寮生活の楽しみ
 - 第四節 経営の行き詰りと閉校
- 第十一章 世紀を超えて―創立一五〇周年を目指し
 - 第一節 明治学院における宗教活動
 - 第二節 教養と大学教育
 - 第三節 明治学院同窓会の歩みと大学同窓会の発足
 - 第四節 専門教育・研究の充実
 - 第五節 Do for Others (他者への貢献)

明治学院ではこれまで年史として、一九二七年に『明治学院五十年史』、一九七七年に『明治学院百年史』などを刊行しているが、本書はこれらに続くものである。なお『明治学院百五十年史』は、通史を扱うこの本編とテーマごとの論考から構成されるテーマ編から成るが、後者は現時点（二〇一三年二月）で未刊ということもあり、本稿では本編のみを対象とする（以下、それぞれ『五〇年史』、『一〇〇年史』、『一五〇年史』と略す）。

本書では学校の通史をその創立から説き起こすのではなく、北村透谷、島崎藤村、賀川豊彦といった明治学院に関わる人々とその文章をとり上げること、その時代の状況を代弁させている。

続いて第一章から第四章までが、創立時代から昭和戦前期までを対象としている。本書後半の、第五章から第十一章までが戦後を対象としている。

前回の『二〇〇年史』と比べて構成上の大きな相違は、戦後の叙述の大幅な増加であるが、戦前については、『一〇〇年史』の構成を踏襲している部分が多い。また、『二〇〇年史』と同様に社会問題との絡みや関連人物の群像史的な要素が濃厚であることも大きな特徴である。

2、本書の特色

次に内容について気づいた点を思いつくままにいくつか挙げてみたい。

本書は、アメリカ長老教会をはじめとする各教派の東アジア伝道から説き起こし、ヘボンによる私塾を源流として、その後三つの教派が共同して明治学院という学校を作り上げていった姿を描いている。

このように明治学院は、単一の教派ではなく複数の教派が共同して出来上った学校である。こうした複数の教派間の関係の難しさがあるが、教派主義と超教派主義の対立など、本書ではこうした問題にもメスを入れている。

ところが本書を読んでも、オランダ改革派と長老教会がどのような教派で、どういう関係をそれまで持っていたのか、評者にはよく分らなかった。スコットランド長老教会については、一応その成り立ちについて説明があるが、オランダ改革派については全く言及がない。また、本書では、当初ミッシヨンとの関係が深かったことが描かれるが、その後その関係性はどのように推移していったのかについても不明確である。評者の不勉強といわれればそれまでだが、本書は専門の研究者だけではなく、校友や一般の読者を対象としているはずである。そのあたりについて、一通り説明があってもよかったので

はないかと思う。

社会問題との関わりや関係する人物を随所でとり上げていることは、『二〇〇年史』などこれまでの明治学院の年史類の大きな特徴のひとつとなっているが、本書でもこうした方法が駆使され、叙述の深みを増している。

また本書では、学校内で生じた様々な問題についても多くの筆が割かれていることも特徴のひとつである。

特に、中学部や高等学校など中等教育機関における生徒の「不行状」については、戦前・戦後を通じて、明治学院では『五〇年史』以来比較的あけすけと記述されている。本書でも戦後の中学・高校における礼拝や生徒指導の問題などに、突っ込んだ記述がみられる。

チャペルや明治学院教会といった、キリスト教活動関係についても、『二〇〇年史』に比べて踏み込んだ叙述がなされている。明治学院教会の行き詰まりと再建の繰返しなど、苦闘するさまをうかがうことができる。

大学紛争については、『二〇〇年史』が一通り経緯を羅列しているだけに留まっていたのに対し、本書では、紛争の背景として学生たちによる「キリスト教主義」に対する問いかけがあったことを指摘するなど、以前の年史類の流れを踏襲しつつも、新たな領域に足を踏み出している。

その一方で、学校内部の問題に気をとられ過ぎて、他

のキリスト教学校との比較の中で考えるという視点には乏しく、その結果史実の評価に首をかしげざるを得ない箇所も散見する。

例えば一九〇五年の明治学院財団法人寄附行為の制定について、申請や認可が遅かったような書き方をしているが、実際には主要キリスト教学校の中では、明治学院の財団法人化は同志社（一九〇一年）に次いで早い。青山学院財団法人は翌一九〇六年、財団法人立教学院に至っては一九三一年の設立なので、比較的早期に財団法人化されているということが出来る。他のキリスト教学校との比較の中で考えると、また異なった位置づけが見えてきたかもしれない。

戦後に関しては、学院と大学を一体化させた構成をとっているのに対して、中・高は別建てで章節を構成しているが、一見するとこうした構成は中高が「付属校」的な存在との印象を受けてしまう。実際には本書を読み進めると、高校から大学への「移行」問題などについても触れられており、両者の関係が単純なものではなかったことがわかる。ただ一方で、学院と大学の記述が一体化していることで、戦後の中高大各学校間の制度的な基本的な関係が分り難く、戦後の学院全体の動きが捉えにくくなってしまう。

また、戦後の途中から時代を行きつ戻りつしながら叙

述されているので、通史の流れが掴みにくくなっている。特に戦後の部局の部分などでは、記述のバランスが難しく、まとめて長期間を記述してしまった方がよい場合もあるが、その困難さをあらためて痛感した。部局史的な部分では、現状分析的な記述が多くを占めているものも多く、国際学部に至っては、設置に至る経緯については全く触れられていない。

もう一つ本書を通読して気になったのは、注の付け方に一貫性が乏しいことである。また、基本的な事項でも出典不明の箇所が少なくない。とりわけ後半になるに従って、注の数は減り、戦後については一部を除き出典注自体が付されていないところが多い。

例えば、二九四頁では戦後新制の教育制度が発足する際に、中学校を七年制高等学校に改組する構想があったことに触れられているが、『一〇〇年史』にも記述がなく、いったいいかなる史料に基づいているのか分らない。とりわけ後半にこうした箇所が目につく。

また戦後の大学紛争や大学改革問題に関連して声明や意見書の類が多数出され、本文中でも触れられているところも多いが、これらも出典が記されていないことが多い。こうしたことでは記述内容の検証ができない。

3、創立年の問題

すでに本稿で述べてきたように、キリスト教学校の年史として本書は、これまでにはない試みをするなど、高く評価できる部分も少なくない。だがそれにも関わらず、本書は基本的なところで、大きな問題を含んでいると言わざるを得ない。

それは創立年の問題である。

『一〇〇年史』は、一九七七年に刊行されたが、今回の『一五〇年史』は、二〇一三年の刊行であり、前回から三十数年しかたっていない。

これは『二〇〇年史』までは、一八七七年の東京一致神学校の設立を以て明治学院の創立と捉えてきたのに対し、『二五〇年史』では一八六三年から数えるようになったことに起因している。

二〇〇〇年に学校法人明治学院理事会は、創立年を変更し、一八六三年のヘボン塾の開設にその起源を求めたことを決めた。今回の『二五〇年史』は、「創立」を変更してから初の明治学院の正史である。

本書の中では、創立年の変更について当然説明があり、学院長の大西晴樹は①東京一致神学校の後身である明治学院神学部は東京神学大学に統合され、現在明治学院から分離している。②一方、キリスト教普通教育を行う東京一致英和学校の系譜をたどればヘボンの私塾に行

きつく、としている。

確かにヘボンが一八六三年に私塾を開設し、その系譜をたどれば明治学院につながることも自体は、まちがいない。しかし、それを即「創立」とするかは別問題である。これまで行なってきた東京一致神学校開設時を以って「創立」とする説明は、誤りだったというのだろうか。少なくともその辺りの総括をする必要があるのではないかと思う。

これまで明治学院ではアメリカ長老教会、アメリカオランダ改革派教会、スコットランド長老教会といった各教派の「一致」というところに、アイデンティティの重点を置いていた。

この中でヘボンが一八六三年に創立した私塾は、最も時期が早いものであり、時系列的にはここに端を発していると考えられることもできないことはないだろう。

だが、ヘボンはアメリカ長老教会から派遣された宣教師であり、この時期にはオランダ改革派は独自に活動し、日本での伝道活動を進めつつあった。スコットランド長老教会は、まだ日本に宣教師を派遣していなかった。このように後に明治学院を形作ることになる三教派は、当初独自に日本での伝道活動を展開していたのである。

明治に入ると、オランダ改革派の宣教師であるスタウ

トや続いてバラは、伝道を進める中で自ら私塾を立ち上げた。確かにこれらの私塾はヘボン塾より創立は新しく、また最終的には明治学院の中に取り込まれていった存在である。

しかし、これらの私塾は当初、オランダ改革派教会のミッションによって設立されたものであり、ヘボンや続いて私塾を設立したカロザースなどは、別個の活動主体であった。

ヘボン塾を明治学院の「創立」とすると、この塾に端を発する系統が明治学院の「正統」であり、オランダ改革派など、他の系統は「傍流」となりかねない。

実は、何をもって「創立」とするのかは、明治学院だけでなく多くの学校が問題を抱えている。

例えば、メソジスト監督教会系のキリスト教学校として青山学院がある。現在この学校は、一八七四年を創立年としている。これはメソジスト監督教会婦人海外伝道局から派遣された宣教師スカーンメーカーが私塾を開設した年である。ところが青山学院がこの年を以て学校の創立とするようになったのは、第二次世界大戦後しばらくたってからのことである。

それまで青山学院では、長らく一八八三年を創立年としてきた。これはメソジスト監督教会が、青山の地に東京英和学校を設立した年である。

スクーンメーカーが開設した私塾女子小學校は、その後青山女學院と称し、女子校となっていた。一方、東京英和学校はその後青山學院と称し、男子校となっていた。両者は明治、大正時代を通じて別々の学校として存在した。

青山學院と青山女學院は、関東大震災を契機として合併するが、その後も二十年以上にわたり、東京英和学校をもつて青山學院の「創立」としてきた。先にも触れたように、戦後この見解を改めて女子小學校の開設から数えるようになった。ところが創立年変更後初めての年史となった『青山學院八十五年史』でも、その明確な理由は説明されていない。

しかし、現在の青山學院の多くを占める青山學院大学は、男子系の青山學院から成り立ったものであり、スクーンメーカーの女子小學校の系譜を直接受け継いではいない。そうした中で、学校の来歴を語るのは多くの困難を伴う。こうした来歴にまつわる語りの分裂は、単に過去の回顧に留まるものではなく、今後の学校のあり方を考える際にも大きな影響を与えていることはまちがいない。

もちろん、スクーンメーカーが女子小學校を開設したことや、ヘボンが私塾を開設したこと自体は事実であるが、どれをもって「創立」と考えるかは、各学校の性格

や位置づけに大きな影響を及ぼす。

従って、「創立」を変えらるということは、学校の性格に対する自己認識も変えらるということにつながる。学校に対する自己認識が変われば、それに基づいて語られる学校の来歴にも影響を及ぼすことは避けられない。ところが『一五〇年史』では、「重複を避け」るとして、『二〇〇年史』までの叙述を踏襲、ないしは要約している部分が非常に多い。

もとより、過去に起こった事象を全て叙述するということは無理であり、歴史を編む際には自ずと取捨選択がなされることは言うまでもない。ただそれは、その時点で歴史を語るのに何がふさわしいのか、重要なのかという観点で行われるべきであり、以前の年史と重複するかどうかということは問題ではないだろう。

少なくともかつてなぜ東京英和一致神學校に起源を求めていたのか、その要因と過程くらいは、総括しておくべきだったのではないだろうか。

4、戦時中の問題とその評価をめぐって

戦時期はとりわけミッシヨンスクールの歴史を語る上で重要な時期といえる。前回の『二〇〇年史』では、この時期を一学徒兵の個人史を追うことで代弁しているが、本書では学院全体の動向に重点が置かれるように

なっている。

戦時中の明治学院に関しては、一九九五年に当時の学院長中山弘正が、戦時中の理事長富田満や学院長矢野貫城など学院関係者について「時局下の植民地支配の推進に手を貸し、戦争協力を行った」とした「戦責告白」を行っている。このことは「責任の所在があいまいにされがちで、日本の一般的傾向とは一線を画」すと本書が自賛しているように、評価の難しいことに一定の見解を示すということ自体は確かに重要なことだと言える。だが、本書の他の部分の多くでは、こうした「主体」や「行動」の検証はそれほど熱心になされたわけではないという印象をどうしても抱いてしまうので、本書の他の箇所と比しここだけが突出しているという印象はぬぐえない。

また、当時の学院関係者らの置かれていた状況を考えてみると、こうした評価には首をかしげざるを得ないところもある。

例えば矢野貫城院長は、「戦責告白」や本書では、時局に追従するのみであったように描かれるが、実際には彼なりにキリスト教学校としての明治学院を守るために腐心していたようだ。

当時、文部省専門教育局監理課長として明治学院を含む高等教育機関の監督行政に当たっていた劔木亨弘は、矢

野が青山学院など他のキリスト教学校に対する陸軍の動向に気を配るとともに、明治学院をキリスト教学校として存続させることに心を砕いていたことを後に回想している¹⁾。

明治学院は一九三八年に「教育ニ関スル勅語ノ趣旨ヲ奉戴シ」との文言を寄附行為に付加しているが、これは矢野の院長就任前である上に、その後もキリスト教学校であることを放棄したわけではない。そのあたり、キリスト教主義を寄附行為から全面的に削除した立教学院などと比べると戦時中の対応についてかなりの差があったと言わざるを得ない。

確かに戦時中の矢野ら当時の学院幹部の行ないには、今日の視点からすると問題があったことも確かだろう。だが、ひたすら時流に媚びていたわけではなく、厳しい制約がある当時の状況の中で彼らなりにその役割を懸命に果たそうとしていたのである。

5、本書の意義

本書の最終章では、明治学院の教育モットー“Do for Others”について強調されているが、実は本文中にこのモットー自体の来歴については、誰がいつどのような意味で唱えて定着していったものなのかほとんど言及されておらず、この言葉がどのような来歴を持つのか、部外

者にはうかがうことができない。このことばが、ヘボンが唱えたもののなか、それとも第一一代学長大塩武のような、後世の人間が作り出したもののなか、はつきりしないのである。歴史を検証するというのなら、まずこの辺りを掘り下げるべきだったのではないだろうか。

なお、本書は編集委員会のメンバーが分担したようだが、各章ごとの執筆者は列挙されているが、実際にどの部分を誰が担当していたのかは明示されていない。もちろんこれは、刊行委員会が原稿に手を加えたことによるものだろうが、本書が明治学院の歴史に関する個々の関係者の研究調査活動の成果と考えた場合、やはり執筆箇所が明示されていないのは、問題が多いと言わざるを得ない。とりわけ本書は大嘗祭問題など、政治性の強い部分も多く、本書の特色の一つとなっているが、それだけに執筆者の責任表示ははつきりとさせておくべきではなかっただろうか。

以上、批判めいたことも述べてきたが、本書が長い歴史を有するキリスト教学校が歴史と正面から向き合ったという点で、貴重な成果であることはまちがいになく、今後のキリスト教学校の年史の編纂にとって大いに参考となるだろう。

(1) 註

『鰐木亨弘氏談話速記録』（内政史研究資料・第二四九―二五三集 一九七三―七五年）、および氣質健生による鰐木亨弘インタビュー録音記録。前者は、文部官僚としての鰐木のライフヒストリーなので、明治学院および矢野については、軽く触れられている程度なのに対し、後者は戦時中のキリスト教学校がメインテーマなので、矢野の言動、行動についても具体的に言及がある。

この中で鰐木は、次のように矢野について述べている。

（一九四三年六月、青山学院に対して陸軍の臨時査閲が実施されるとの情報に接して）「明治学院の矢野貫城先生は、しよっちゅうそのことを心配されてね。」

（青山学院に対する査閲の翌朝）「すぐ矢野貫城先生がこられてましてね、鰐木君、どうだったと。あなたのところは安心ですよ。あなたのところへは行きませんから。ああそうかといって安心されました。」